

〔調査報告〕

## IT利用が父母の夫婦関係と子育て関与に及ぼす影響

佐々木 卓 代

### 要 旨

近年、20～40歳代の男女の約95%がIT（携帯電話・パソコン）を利用しており、個人のIT利用率は大都市周辺が高いことが報告されている（総務省 2012）。そこで、本研究は、首都圏在住の未就学児を持つ父親と母親を対象に行ったIT利用と家庭生活に関する調査データを用い、IT利用が夫婦関係良好度と子育て関与に対して、どのように影響を及ぼしているのかを検討したものである。パス解析による父親459人と母親431人の分析の結果、IT利用時間が多いほど配偶者との会話時間が増え、子育てに関する配偶者間のコミュニケーション頻度が高くなっていった。さらに、父親も母親も携帯電話による配偶者とのコミュニケーション頻度が、配偶者間の対面コミュニケーション頻度を高め、それが夫婦関係良好度と子育て関与を増加させていた。従って、父親と母親のIT利用は、夫婦間の会話時間や子育てに関するコミュニケーションを高める直接効果があり、間接的に夫婦関係良好度と子育て関与度を高める効果を示した。特に、父親の場合は、夫婦関係良好度が高いほど子育て関与度が高められることから、夫婦間のIT利用が男性の子育て関与促進に有効に作用することが示唆された。

### I. 問題の背景と研究の目的

総務省の「平成23年通信利用動向調査の結果」によると、現在の日本のインターネット利用者数は9,610万人であり、人口普及率は79.1%となっている。年代別普及率は、20歳代97.7%（男性97.6%・女性97.9%）、30歳代95.8%（男性95.7%・女性95.8%）、40歳代94.9%（男性95.6%・女性94.3%）であり、男女における普及割合も殆ど差がなく、インターネットを利用していない割合は僅か2.3～5.1%である。同調査の20～40歳代の個人利用率は、携帯電話が94.2～97.3%、パソコンが86.9～91.7%であり、大都市のある都府県の個人利用率は80%以上を占めている。

このように、近年においては携帯電話やパソコンなどのIT (Information Technology) が、日常的なコミュニケーションツールとして人々

の生活に深く浸透しており、それによって対人関係に対する意識の変化や問題などが起きていることが報告されている（酒井 2009）。従って、ITを利用することが、人々の意識や人間関係に対してどのような役割を果たし、どのような影響を及ぼしているのかなどを考慮する必要性が生じている。特に、インフォーマルなネットワークに対するITの影響を検討する重要性が指摘されており（石井クンツ 2009a）、ITと夫婦・親子などの家庭内のコミュニケーションの関連を検討することが必要である。

次に、近年の日本の家族や夫婦をめぐる問題をみると、特に、少子化・非婚化傾向が加速している。2011年の出生率は前年同様1.39ながら、出生数は105万人と戦後最低となり、婚姻率は前年を下回って女性の生涯独身率は上昇し、離婚率も減少せずに横ばいで婚姻件数は戦後最低の状態である（厚生労働省2012）。また、

日本は長寿社会となり、シニア世代においては、定年後の熟年離婚など多様な問題を抱えており、家庭役割を果たさずに仕事中心の生活を送った男性は、定年後に夫婦・親子関係を再構築できずに孤独である場合が多いことが指摘されている(電通広報室 2008)。ゆえに、男性も結婚当初から子育てや家事などの家庭役割を担い、妻や家族とのコミュニケーションを図ることを通して夫婦や親子の関係を良好な状態に保つ重要性が示唆されている。

共働き家庭においては、休日の夫の子育てや家事の時間が少ないと妻の第二子出産意欲が低減することが示され(厚生労働省2010)、男性の子育て関与は少子化防止にとっても重要であることが示唆されている。従って、今後ますます男性も子育てや家事を担う必要性は高まることが推察される。父親の子育て関与に対しては、夫婦の関係性が影響を及ぼすことが示唆されていることから(McBride & Ranel1998)、夫婦関係が良好であるかどうかは、家族を形成して維持し子育てを行う観点からも重要である。よって、ITの普及や少子化・非婚化傾向の進行を背景として、IT利用が夫婦の関係性や子育て関与にどのように影響しているのかを検討することは今日的な課題であると考えられる。さらに、ITを利用することで場所・時間に制約されずにコミュニケーションが可能であることや共働き家庭の増加傾向による保育園等への子どもの送迎や日常的な連絡などの必要性が増していることが推察される。従って、ITを利用することが、夫婦のコミュニケーションにどのような役割を果たしているのかの検討を行うことも必要である。そこで、本研究の目的は、未就学児を持つ父親と母親のIT利用が、夫婦のコミュニケーションや関係性、子育て関与に対してどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることとする。

## II. 先行研究と仮説

### 1. 先行研究

海外のITと家族に関する先行研究において、ITが親子関係にどのような影響を及ぼしているのかなどの研究(Mesch2003: Lee & Chae2007)、ITと子どもの幸福に対する影響を扱った研究(Subrahmanyam & Lin2007)や親が子どものIT利用を監視することについての研究がある(Aslanidou & Meneses2008: Padilla-Walker & Coyne2011)。また、子どもを持つ親は孤独であり、社会のサポートや他の親とのコンタクト、子どもを育てることについてのより多い情報と補助を必要としていることも提示されている(Scharer & Faan2005)。そして、幼児をもつ多くの親たちは、子どもの養育方法の情報をオンラインで集め、ITを社会的サポートの資源として認識し始めていることも報告されている(Sarkadi & Bremberg 2005)。さらに、ITの過度な利用は、家族とのコミュニケーションの減少や友人・対人関係を疎遠にしたり妨げたりする面と(Nie 2001: Krout et al. 1998)、ITが家族・友人などとの関係改善や親密さ・関係維持の両方に役立ち、利益をもたらすなどの2面性があることが指摘されている(McKenna et al. 2002: Krout et al. 2002)。

日本におけるIT利用と家族及び対人関係に関する先行研究では、母親が若いほどITの利用が多く(山田2005)、母親の学歴が高いほどITを利用している傾向が示されている(橋本ほか2002)。また、ITによるコミュニケーションは、表情が読み取れないことから誤解が多く発生し、若者や子どもの人間関係を表面的で希薄なものにする傾向が指摘されている(尾木 2009)。そして、IT利用により常に誰かとつながる状態となることから、友だちと一緒にいる時にも携帯電話を通して他の相手に向かっていないことに対して、子どもたち自身が否定的感情をあまり感じていないことも報告されている(酒井2009)。これは、ITが日常生活に広く浸透したことにより、実際に対面している相手に対する

人々の配慮などが変化し、希薄化していることの現れである。近年では、子ども連れの母親や夫婦が、傍にいる配偶者や子どもに向かわずにそれぞれが携帯電話に向かったままの場面を見かけることも増え、夫婦のコミュニケーションのあり方や子どもの言語的・情緒的発達に対する影響などが懸念されている。日本において、子育て期の夫婦の関係性や子育てに対するIT利用の影響は石井クンツほか(2009a)が明らかにしているが、母親のIT利用と夫の家事・子育て関与の関連を検討した研究において、携帯電話やパソコンを利用することで夫の家事・子育て行動が増加し、夫が子育てを多く行うほど母親の夫婦関係満足度が高まることが報告されている(佐々木 2009c : Sasaki 2011a)。

次に、夫婦関係の先行研究においては、夫よりも妻の結婚満足度に対する検討が多くなされており、夫が家庭役割に参加することが妻の夫婦関係満足度を有意に高め(田中 2007)、妻の精神的な安定に影響する。このように、母親においては、夫の家庭役割遂行が夫婦関係の良好性にプラスの影響を及ぼすことが示され、夫婦の子育て協力が妻の夫婦関係の良好さの認識に影響することが示唆されているが(菅原2003 : Sasaki 2011a)、夫の夫婦関係良好度に対する要因の検討はあまりなされていない。さらに、夫婦の関係性が母親の子育て関与にどのような影響を及ぼすのかもあまり検討されていない現状である。

一方、男性における子育て参加の先行研究においては、夫婦の関係性が良好であるほど、子どもに対するかかわりが多いことが報告されている(McBride&Rane1998 : 佐々木 2009b, 2010a)。夫婦の関係が良いと父親の子育ての重要性に対する意識が高く(佐々木 2009a)、過干渉的養育態度が減じることが明らかになっている(Sasaki 2011b)。

また、夫との会話時間が長いことや(大日向・新道1994 : 佐々木 2010b)、良好な夫婦関係と夫のサポートなどが妻の育児不安を低減する要因となっている(数井ほか 1996)。そして、男

性にとっても、夫婦の会話時間が長いほど妻に情緒的サポートを受けていると感じてストレスなどを減じる働きがあることが示唆されている(柏木・平山 2003)。よって、夫婦の良好な関係性には、会話時間やコミュニケーションの多さが重要な役割を果たしている。

以上の先行研究により、父親の子育て関与促進のためには夫婦の良好な関係性が重要な要因であり、夫婦の会話時間やコミュニケーションが夫婦の関係性に影響を及ぼすことが明らかになった。そこで、本研究では、夫婦におけるインフォーマルなIT利用が、夫婦の会話時間やコミュニケーション、夫婦の関係性や子育て関与にどのように影響を及ぼしているのを明らかにすることを目的とする。さらに、夫婦の関係性が子育て関与に影響しているのか、また父親と母親において相違点があるのかを検討することも目的とする。

夫婦の関係性に影響を与える要因として、本研究においては、父親と母親の属性である年齢、学歴、年収を独立変数とし、母親の年収と就業の有無の相関が高いことから就業状況は使用しないことにする。また、子育て関与は子どもの年齢が低いほど多いことが明らかになっていることから(石井クンツ 2009b)、子どもの年齢も独立変数に含め、最終従属変数を子育て関与度とし、夫婦関係良好度を媒介変数とする。

次に、ITに関する媒介変数として、IT利用時間とITによる子育てに関するコミュニケーション頻度を設定し、夫婦の会話時間と対面コミュニケーション頻度も媒介変数とする。これは、IT利用時間が長いと夫婦の会話時間が減ることも推測されること、また、IT利用が夫婦間の子育て関連のコミュニケーションに対してプラスの作用がどうかを検討する必要があるからである。最後に、ITと対面による子育てに関するコミュニケーションが夫婦関係良好度と子育て関与度にどのように影響を及ぼし、夫婦関係良好度が子育て関与度に影響しているかを明らかにする。

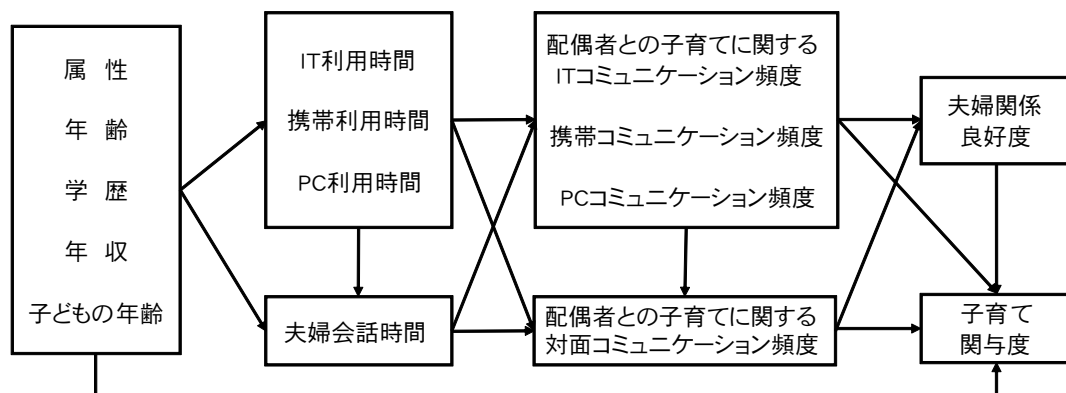


図 1. 分析モデル図

## 2. 本研究における仮説

図 1. に分析モデル図を提示する。先行研究と本研究の目的にそって、主に以下の 4 つの仮説を設定して検証を行う。

仮説 1：IT 利用時間が多いほど夫婦の会話時間が多く、配偶者との子育てに関するコミュニケーション頻度が高い。

仮説 2：配偶者との子育てに関する IT によるコミュニケーション頻度が高いほど配偶者との対面コミュニケーション頻度が高い。

仮説 3：配偶者との子育てに関する IT と対面によるコミュニケーション頻度が高いほど夫婦関係良好度が高く、子育て関与度が高い。

仮説 4：夫婦関係良好度が高いほど子育て関与度が高い。

## Ⅲ. 方法

### 1. 使用データと調査対象者・分析対象者

本研究は、「IT 社会における育児期のインフォーマルネットワークと世代間関係：日米比較から」の母親データ（2009 年調査）と、「情報社会における育児期の親の IT 利用と家族関係：日米比較から」の父親データ（2011 年調査）を使用している。調査対象者を小学校入学前の子どもを持つ母親と父親とし、世論調査や市場調査を専門とする公式認証を受けている民間の調査会社に委託して、両研究プロジェクト

によって作成された質問紙「インターネットと家庭生活に関する調査」を行った。両調査は、郵送パネル調査に登録している首都圏在住者から無作為に抽出した母親（20～45 歳）2000 人・父親（25～45 歳）2500 人に対して送付し、未就学児童がない場合は質問紙の破棄をお願いする形とした。

回収数は、母親 524 人（有効回収率 26.2%）・父親 475 人（有効回収率 23.8%）であったが、インターネットを使用していない回答者を除いたため、最終的な分析対象者は母親 431 人・父親 459 人である。また、本調査は、主に携帯電話とパソコンによるインターネット利用状況を聞いているため、本論文の IT とは携帯電話とパソコンを指すものとする。

ここで、夫婦ではない父親と母親のデータであることと調査年度が違うデータの比較研究を行う妥当性について検討する。まず、母親調査においては配偶者の属性を聞いていないものの、父親調査においては配偶者の属性を尋ねている。そこで、父親調査の配偶者と母親調査の属性と比較すると、父親調査の妻と母親調査の平均年齢が 36.11 歳と 35.79 歳、学歴は双方ともに 13.88 年、就業割合は 42.6% と 41.5% とほとんど差がない状況である。さらに、両調査ともに同じ調査会社に登録している首都圏在住の有配偶で未就学児童がいる 45 歳以下の家庭を対象としていることから、社会階層的に大きな差が

ない可能性が推察される。よって、夫婦ではないものの、分析結果を比較して父親と母親における傾向を検討しても妥当であると判断した。

また、調査年度が2年違うことについて、2009年と2011年における20～40歳代のインターネット利用率がかなり違うのであれば、父親調査と母親調査のインターネット利用についての比較は不可能であると考えられる。しかし、2009年と2011年のインターネット利用率を比較すると20歳代97.2%・97.7%、30歳代95.3%・95.8%、40歳代95.4%・94.9%とほとんど変化がなく、男女別の利用率も男性95.6%～97.6%・女性94.3%～97.9%とほとんど違いがないことから(総務省 2012)、年度が違う2つのデータにおいて、インターネット利用に関する父親と母親の調査結果を比較することは可能であると判断した。さらに、父親と母親の就業状況には違いがあるが、本調査は、プライベートにおけるインターネット利用を調査していることから、それらと夫婦関係や子育てに関する関連を比較検討することは妥当であると判断した。

## 2. 使用変数

### (1) 独立変数に使用した父親と母親の変数

妻の就業状況は夫婦関係満足度に影響を与える要因であるが、収入と相関が高くなることから分析に含めなかった。学歴の年数は等間隔ではないために教育年数に変換し、年収も等間隔で質問していないため中央値に変換して使用している。理由として、等間隔ではない順序尺度の場合、最頻値や中央値に変換して分析することが多いが、一般的に中央値の方が多くの情報を与えるとされて分析に用いられていることによる(酒井 2005)。

### (2) IT利用時間と夫婦会話時間

#### a) 携帯電話とパソコンの利用時間

プライベートで、一日平均してそれぞれ何時間使用しているのかを以下の6件法で質問している。1～6で尋ねた利用時間が等間隔ではない順序尺度のため、(1)で述べた同じ理由で、分

析には( )に示した中央値に変換して使用している。

1. 30分未満 (15分), 2. 30～1時間未満 (45分), 3. 1～2時間未満 (90分), 4. 2～3時間未満 (150分), 5. 3～4時間未満 (210分), 6. 4時間以上 (300分)

#### b) 夫婦会話時間

配偶者と一日平均してどれ位の時間会話をしているかを以下の6件法で質問している。1～6で尋ねた利用時間が等間隔ではない順序尺度のため、(1)と同様の理由から、分析には( )に示した中央値に変換して使用している。

1. ほとんど会話していない (0分), 2. 30分未満 (15分), 3. 30～1時間未満 (45分), 4. 1時間～2時間未満 (90分), 5. 2時間～3時間未満 (150分), 6. 3時間以上 (210分)

### (3) 使用尺度

a) 配偶者との子育てに関するコミュニケーション頻度(携帯電話・パソコン・対面)

「子育てに必要な情報を得る」「子育ての悩みや心配事を相談する」「子育ての連絡(送迎・預かり・遊び等)をとる」「子どもの写真や動画を見せる、送信する」「子育ての楽しみや苦勞を伝える」の5項目について、それぞれ配偶者との携帯電話とパソコンと対面によるコミュニケーションの頻度を5件法(1. 一日数回, 2. 週数回, 3. 月数回, 4. 年数回, 5. しない)で質問し、得点を逆転して合計し合成変数として使用した(クロンバック $\alpha$ 係数: 携帯電話-父親.88・母親.81, パソコン-父親.88・母親.78, 対面-父親.84・母親.80)。

#### b) 夫婦関係良好度

夫婦関係良好度を測る項目として、「私たちは良い結婚生活を送っている」「配偶者との関係はとても安定している」「配偶者との関係は私を幸福にする」(以上: Norton 1983=邦訳諸井 1996)「配偶者を一人の人間として深く尊敬している」(菅原ほか 1997)の4項目を使用し、5件法(1. あてはまる～5. あてはまらない)で質問した。因子分析の結果、1次元構

造が確認されたので得点を逆転して合計し、合成変数として分析に使用した (クロンバック  $\alpha$  係数: 父親.94・母親.93).

#### c) 子育て関与度

子育てに関して次の6項目「子どもの食事の世話をする」「子どもと一緒に食事をとる」「子どもの着替えや身支度の世話をする」「子どもの遊び相手になる(母親) / 子どもと家でおもちゃやゲームで遊ぶ(父親)」「子どもと一緒に風呂に入る」「子どものオムツやトイレの世話をする」を使用した。各質問に対する回答方法は、1. 毎日, 2. 週に5~6回, 3. 週に3~4回, 4. 週に1~2回, 5. 全くない, である。因子分析の結果, 1次元構造が確認されたので得点を逆転して合計し, 合成変数として分析に使用した (クロンバック  $\alpha$  係数: 父親.89・母親.80)。

### 3. 分析方法

分析方法として, SPSS18.0バージョンを使用し, 分析に用いた変数の記述統計分析を行い, 次に父親と母親の変数の平均値には有意な差があるのかどうかを t 検定によって分析を行った。最後に, AMOS19.0バージョンを使用し, 分析モデルに従って父親と母親のパス解析を行い, 父親と母親の分析結果を比較検討した。

## IV. 結果

### 1. 記述統計分析結果と平均値の t 検定結果

表1に使用変数の記述統計分析結果, 表2に父親と母親の変数の平均値の t 検定結果を提示した。父親と母親の平均年齢は37.4歳と35.8歳, 父親の子どもの平均年齢が3.7歳で母親の子どもの平均年齢が3.8歳, 教育年数と個人の収入

表1 分析に用いた変数の記述統計

変数項目	父親(N=459)			母親(N=431)		
	範囲	平均値	標準偏差	範囲	平均値	標準偏差
年齢	25-45	37.36	4.53	23-45	35.79	4.30
学歴(教育年数)	9-18	14.44	2.14	9-18	13.86	1.58
個人の年収	0-1750	580.34	225.03	0-950	56.50	127.31
子どもの月齢	1-82	43.84	22.99	0-82	45.34	23.68
携帯利用時間	15-300	57.48	60.44	15-300	41.42	49.25
パソコン利用時間	15-300	66.67	63.40	15-300	51.65	50.84
夫婦会話時間	15-150	68.37	42.97	0-210	78.69	61.91
配偶者携帯コミュニケーション頻度	5-25	11.06	4.92	5-25	11.54	4.60
配偶者パソコンコミュニケーション頻度	5-25	6.48	2.77	5-18	6.08	2.12
配偶者対面コミュニケーション頻度	5-25	17.33	4.66	5-25	17.20	4.39
夫婦関係良好度	4-20	17.19	3.23	4-20	15.70	3.60
子育て関与度	6-30	15.17	5.64	12-30	27.83	2.97

学歴(教育年数): 1. 中学校=9 2. 高等学校=12 3. 専門学校・各種学校=14

4. 短大・高専=14 5. 大学=16 6. 大学院=18

年収(中央値に変換): 1. 収入無→0 2. 100万未満→50万 3. 100~129万→115万

4. 130~199万→165万 5. 200~299万→250万 6. 300~399万→350万

7. 400~499万→450万 8. 500~599万→550万 9. 600~699万→650万

10. 700~799万→750万 11. 800~899万→850万 12. 900~999万→950万

13. 1000~1099万→1050万 14. 1100~1199万→1150万 15. 1200~1299万

(母親のみ1200万以上)→1250万 16. 1300~1399万→1350万

17. 1400~1499万→1450万 18. 1500万→1750万

表2 平均値のt検定結果

変数項目	父親の 平均値	母親の 平均値	平均値 の差	有意確率	t値
年齢	37.36	35.79	1.58	.000 ***	5.328
学歴(教育年数)	14.44	13.86	.58	.000 ***	4.585
個人の年収	580.34	56.50	523.84	.000 ***	42.376
子どもの月齢	43.84	45.34	-1.50	.338 n.s.	-.959
携帯利用時間	57.48	41.42	16.07	.000 ***	4.332
パソコン利用時間	66.67	51.65	15.02	.000 ***	3.883
夫婦会話時間	68.37	78.69	-10.32	.004 **	-2.904
配偶者携帯コミュニケーション頻度	11.06	11.54	-.49	.128 n.s.	-1.522
配偶者パソコンコミュニケーション頻度	6.48	6.08	.40	.016 *	2.414
配偶者対面コミュニケーション頻度	17.33	17.20	.13	.658 n.s.	.443
夫婦関係良好度	17.19	15.70	1.49	.000 ***	6.511
子育て関与度	15.17	27.83	-12.66	.000 ***	-41.517

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

は母親よりも父親の方が高い結果であった。t検定の結果、年齢と学歴と個人の年収は、0.1%水準で平均値に有意差がみられたが、子どもの年齢には有意差がみられなかった。

また、携帯電話やパソコンの利用時間は父親の方が母親よりも多い数値であり、t検定の結果、0.1%水準で有意差が示された。夫婦の会話時間に関しては、父親よりも母親の方が配偶者と会話している時間が長く、t検定の結果、1%水準の有意差がみられた。子どもに関する配偶者とのコミュニケーション頻度の平均値は、IT利用においても対面においてもほぼ同じ程度であったが、t検定の結果、パソコンによる配偶者とのコミュニケーション頻度においては、父親の方が有意に多く、5%水準の有意差が示された。

夫婦関係良好度は、父親の5段階の平均が4.3とかなり高い数値を示していることからかなり良好であるとの認識を持っており、母親は3.9であることからやや高めの良い度認識である。子育て関与度は、母親の5段階での平均は4.6であることからほぼ毎日ということであり、父

親の平均が2.5であることから週に2～3日子育てにかかわるということで、かなりの差がみられた。t検定の結果、夫婦関係良好度と子育て関与度は、0.1%水準で有意差がみられ、この2変数は特にt値も大きく、夫婦関係の良好度に対しては、父親の方が母親よりも有意に高い認識をもち、子育て関与度は母親の方が有意に多いという結果が示された。

## 2. パス解析の結果

まず、父親と母親のパス解析による分析結果の適合度の数値から検討する。父親の適合度はGFI=.973, AGFI=.911, RMSEA=.071であり、母親の適合度はGFI=.968, AGFI=.896, RMSEA=.080である。本来0.05以下であれば当てはまりが良いと判断されるRMSEAの値は両方ともにグレーゾーンである0.05～0.09であるが、一般的にGFI値が0.9以上あれば説明力のあるパス図であると判断して良いとされている(豊田 2008)。よって、父親調査と母親調査のデータと分析モデルの適合度指標は許容範囲であり、妥当であると判断して使用した。

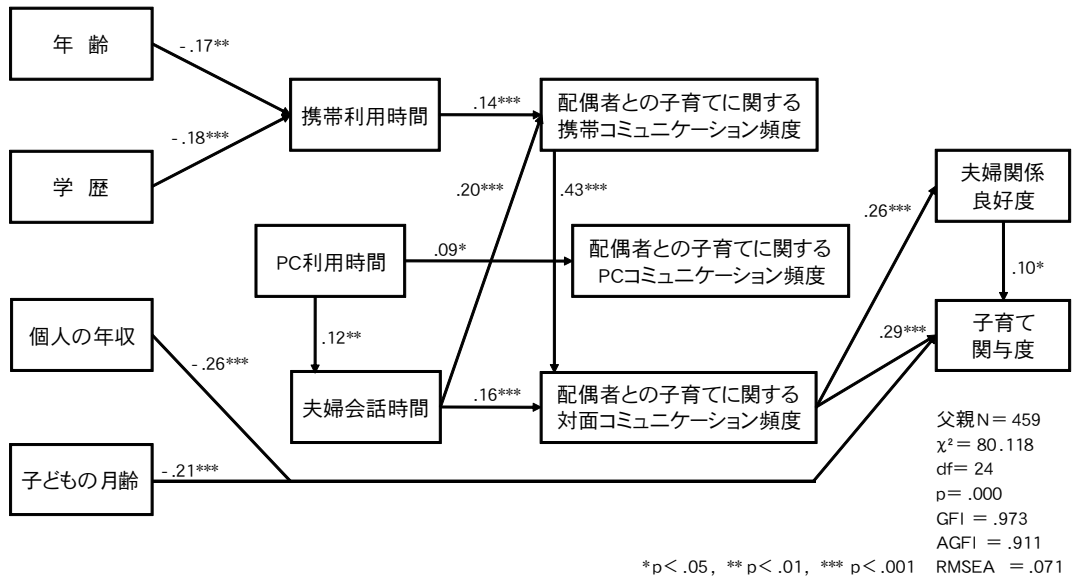


図 2. 父親のパス解析結果

父親データのパス解析の結果から (図 2), 年齢と学歴が低いほど携帯電話の利用時間が多いことが示されたが, プライベートでのパソコン使用と夫婦の会話時間に関しては, 独立変数の影響はみられなかった. そして, パソコン利用時間が多いほど妻との会話時間が増加することが示されたが, 携帯電話の利用時間は影響していなかった. また, 携帯電話の利用時間が多いほど妻との子育てに関する携帯電話でのコミュニケーション頻度が高く, パソコン利用時間が多いほど妻とのパソコンでのコミュニケーション頻度が高いことが示された. 以上から, 仮説 1 は支持された.

そして, 妻との対面でのコミュニケーション頻度が高いほど夫婦関係良好度及び子育て関与度が高く, 夫婦関係良好度は直接子どもとかわる頻度を高めているが, ITによるコミュニケーション頻度は夫婦関係良好度と子育て関与度に影響を及ぼしていなかった. よって, 仮説 3 の一部と仮説 4 は支持されたことになる. また, 父親の年収と子どもの年齢が低いほど子育て関与度が高く, ITを利用することによって夫婦の会話時間が増加し, 妻とのコミュニケー

ション頻度が高くなり, 夫婦関係が良好で子育て行動も多いことが示唆された.

次に, 母親データのパス解析の結果をみると (図 3), 年齢と学歴が低いほど携帯電話の利用時間が多く, 年齢と年収が低いほどパソコンの利用時間が多かったが, 夫婦の会話時間に対する独立変数の影響はみられなかった. そして, 父親と違い, パソコン利用時間は夫婦の会話時間に影響していなかったが, 母親の携帯電話利用時間が長いほど夫婦の会話時間も多くなり, 携帯電話利用時間は子育てに関する夫との携帯コミュニケーション頻度と夫婦の会話時間を増加させ, パソコン利用時間は夫とのパソコンコミュニケーション頻度を高めていた. また, 夫婦の会話時間は夫との子育てに関する携帯と対面でのコミュニケーション頻度を高めていたことから, 仮説 1 が支持された.

そして, 子育てに関する夫との携帯コミュニケーション頻度は, 対面コミュニケーション頻度を高め, パソコンと対面による夫とのコミュニケーション頻度が夫婦関係良好度を高めることから, IT利用は直接・間接に夫婦関係良好度に影響を及ぼしていた. また, 対面コミュニ



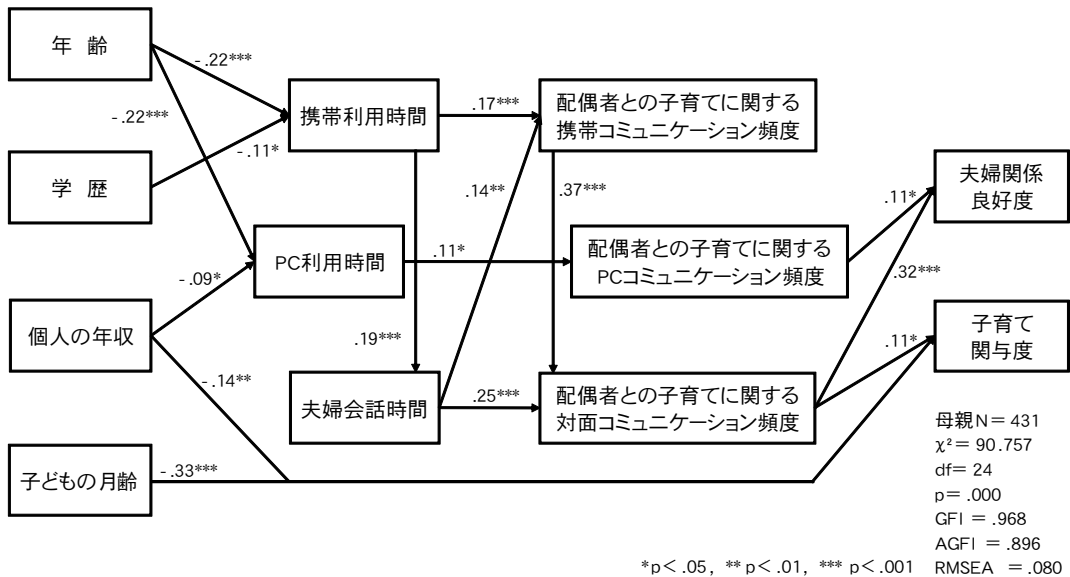


図 3. 母親のパス解析結果

ケーション頻度は子育て関与度を高めていたことから、仮説 3 が支持された。しかし、父親のグループとは違い、母親の夫婦関係良好度は子育て関与度には影響していなかったことから、母親においては、仮説 4 は支持されなかった。また、母親の年収と子どもの年齢が低いほど子育て関与度が高いということが示された。

### V. 考察

夫婦の会話時間に対し、父親においてはパソコン利用時間が、母親においては携帯利用時間がプラスの影響を示し、双方の夫婦関係良好度と子育て関与を増加させる間接効果があることから、夫婦間の IT 利用が良好な関係性と子育て行動の促進につながる可能性が示唆された。これは、夫婦の会話時間は関係性を高めるといふ先行研究の結果と一致しており、夫婦が会話することで子どもの状況の把握と親としての認識を深めること、さらに夫婦の相互理解につながる事が推察される。また、父親の調査において、家庭でパソコンを利用する主な目的は、

家族での外出先や子どもの病院検索等であること示されており、それでパソコン利用時間が妻との会話を増加させる一方、携帯電話利用は帰宅時間などの事務的な連絡であることが多いことが理由として考えられる。母親の場合は、パソコンよりも携帯電話のハンディさによって夫との連絡が増えることで会話も増加することが推測される。また、父親も母親も夫婦の会話時間に属性が影響していないことから、二人の関係性によって会話時間が左右される可能性も推察され、今後、検討すべき課題である。

次に、2 種類の IT のうち、携帯電話においては、父親と母親共に年齢と学歴が低いほど携帯電話の利用時間が長く、携帯電話利用時間が長いほど子育てに関する配偶者との携帯と対面によるコミュニケーション頻度が多く、夫婦関係良好度及び子育て関与が高かった。すなわち、携帯電話の利用は、間接的に夫婦関係良好度と子育て行動を増加させる役割を果たしている。そして、若く学歴が低い夫婦ほど関係性を良好にすることや父親の子育て行動を促進することに対して、IT 利用が有効な手段である

ことが示唆された。このことから、携帯電話利用と学歴の関連が明らかになったといえ、学歴が高いほどパソコンを利用するという先行研究(橋本ほか 2002)と一致する結果であるといえよう。そして、若い夫婦ほど子どもの年齢が低く、日に日に成長が著しい子どもの写真や様子を携帯電話のメール等で配偶者に送信する機会が多いことが推察される。それが、子どもに対する価値や状況認識などを深め、配偶者との対面コミュニケーションの増加につながり、夫婦の関係性も良好になると考える。

そして、父親のパソコン利用時間に対して属性の影響はなかったのは、プライベートでのパソコン利用時間を質問していることが理由として考えられる。また、先行研究では、高学歴の母親ほどITを利用していることが示されたが(橋本ほか 2002)、プライベートなパソコン利用に関しては、学歴の影響はなく、無就業の母親の方がITを多く利用しているという新しい知見が明らかとなった。これは、プライベートのパソコン利用には、時間的余裕が必要であることが考えられ、就業している母親の仕事と家庭役割遂行の煩雑さと大変さが懸念される。そして、父親も母親もパソコンを利用することで配偶者との子育てに関するパソコンコミュニケーション頻度を高め、特に母親においては、それが夫婦関係良好度を高める効果を示し、専業主婦にその効果がみられた。これは、パソコンによって子どもの写真やビデオの整理、子育ての情報検索などを行い、夫婦間のコミュニケーションや良好度にプラスに作用していることが推測される。以上から、子育て期の夫婦間のIT利用においては、対人関係を希薄化させるといったマイナスの効果ではなく、会話時間とコミュニケーションが増加し夫婦の良好な関係性と子育て関与にプラスになる可能性が示唆された。

とりわけ、長時間労働などで平日子どもにかかわれない父親に、ITを利用することによって子どもの状況を知らせることは、子どもに対する愛情や父親役割認識などを高める効果があると推察される。従って、父親の子育て関与度

を高めるためには、ITを利用して夫に子どもの情報を提供することが効果を生む可能性があるといえよう。また、双方の携帯使用が対面コミュニケーションを高めていた理由は、パソコンより携帯の利便性が高いことが考えられる。

そして、父親においてはITによるコミュニケーションは夫婦関係良好度に影響を及ぼしていないが、配偶者との対面によるコミュニケーションは、父親と母親の夫婦関係良好度を高め、父親においては特に子育て行動を増加させるより強い効果を示した。これは、仕事で家庭にいた時間が少ない父親にとって、直接妻から得る子どもの情報はより印象が強くなり子どもへの理解を深め、子育ての重要性に対する認識や父親としての自覚を高めることにつながると推察される。

最後に、夫婦の関係性と子育て関与の関連において、父親は、夫婦の良好な関係により子育て関与が増加する傾向が示されたが、母親の子育て関与に対しては夫婦関係良好度の影響はなかった。従って、先行研究(McBride & Rane1998)と同様に、男性の子育て関与には夫婦の関係性が重要な要因であることが示された。母親が、夫婦の関係性によって子育て関与に影響を受けないのは、自分が子育ての主体であるとの認識が高いことが理由として考えられる。反対に、父親が夫婦の関係性によって子育て関与が左右されるのは、自分が子育てにかかわる主体という意識が低く母親の補助的な親役割として認識していることが推察される。すなわち、父親は夫婦の関係性が良いと家庭役割を遂行して子育てに参加するという立場である傾向が考えられる。よって、今後は、父親も母親と同様に、子育てに対する主体意識を持ち、夫婦の関係性に左右されない親役割認識を高めることが、男性の子育て関与促進には必要である。

以上の結果から、本研究の意義として、子育て期の父親と母親のIT利用が、夫婦の会話時間やコミュニケーションを増加させ、夫婦の良好な関係性や子育て関与にプラスの役割を果たす傾向を提示したことがあげられる。また、学歴

が低く若い夫婦で母親が無業であると時間的余裕があることから、夫婦のコミュニケーションや関係性、子育て関与に対してIT利用の効果が高い傾向にあることを示したこともあげられよう。特に、父親においては、夫婦における良好な関係性が子育て関与を促進していたことにより、ITを利用して相互理解や子育てに対する協力体制を強めることが重要であると考えられる。

本研究の限界として、IT利用が盛んである首都圏在住の父親と母親を対象とした調査ゆえに地方での調査結果とは違う可能性もあることと、夫婦マッチングデータではないことから結果の一般化には慎重になる必要性があげられる。しかし、子育て期の父親と母親を対象にIT利用と家庭生活に対して調査を行い、IT利用と夫婦の関係性や子育て関与との関連を明らかにした点では意義があろう。今後も、ますますIT利用が盛んになることと非婚化・少子化傾向が進行することが懸念されることから、ITを利用することが、いかにして良好な夫婦や親子関係を築いて継続していくことに有効であるのか、または弊害があるのかなど、育児期の夫婦だけではなくシニア世代やシルバー世代の夫婦において研究を行っていくことが重要であると考えられる。

付記：本研究では、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科石井クンツ昌子教授が研究代表者をつとめる科学研究費補助金基盤研究B（課題番号22300246）「情報社会における子育て期の親のIT利用と家族関係：日米比較から」の母親データと、科学研究費補助金基盤研究C（課題番号19500647）「IT社会における子育て期のインフォーマルネットワークと世代間関係：日米比較から」の父親データの提供を受けました。執筆者は、両方の研究会のメンバーであり、質問紙制作等にも携わって研究を行ってきたことから、研究代表者に本データ利用の許可を得て使用しています。ここに心から謝意を表します。

#### 引用文献

- Aslanidou, S. & Menexes, G. (2008). Youth and the Internet: Uses and practices in the home. *Computers & Education*, 51: 1375-1391.
- 電通広報室 (2008). 「シニア世代の夫婦関係に関する『オトナの夫婦調査』結果」
- 橋本良明・辻大介・石井健一・金相美・木村忠正 (2002). 『インターネット・パラドクス』の検証：インターネットが精神的健康・社会的ネットワーク形成に及ぼす影響』『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』18: 334-484.
- 石井クンツ昌子 (2009a). 『平成19～20年度科学研究費補助金基盤研究課題番号19500647研究成果報告書：IT社会における育児期のインフォーマルネットワークと世代間関係：日米比較から』
- 石井クンツ昌子 (2009b). 「父親の役割と子育て参加—その現状と規定要因、家族への影響について」『季刊家計経済研究』81: 16-23.
- 柏木恵子・平山順子 (2003). 「夫婦関係」 稲垣佳世子, 高橋恵子編『児童心理学の進歩』金子書房, 85-115.
- 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘 (1996). 「子どもの発達と母子関係・夫婦関係：幼児をもつ家族について」『発達心理学研究』7(1): 31-40.
- 厚生労働省 (2010). 「第7回21世紀成年者縦断調査」
- 厚生労働省 (2012). 「人口動態統計」
- Kraut, R., Patterson M., Lundmark V., Kiesler S., Mukhopadhyay T., & Scherlis (1998). Internet Paradox: A Social technology that reduces social involvement and psychological well-being? *American Psychologist*, 53(9): 1017-1032.
- Kraut, R., Kiesler, S., Boneva, B., Cummings, J., Helgeson, V., & Crawford, A. (2002). Internet Paradox Revisited. *Journal of Social Issues*, 58(1): 49-74.
- Lee, S. J. & Chae, Y. G. (2007). Children's Internet use in a family context: Influence on family relationships and parental mediation. *Cyber Psychology & Behavior*, 10(5): 640-644.
- McBride, B. A., & Rane, T. R. (1998). Parenting alliance as a predictor of father involvement: An exploratory study. *Family Relations*, 47, 229-236.
- McKenna, K. Y. A., Green, A. S., & Gleason, M. E. J. (2002). Relationship formation on the Internet: What's the big attraction? *Journal of Social Issues*, 58(1): 9-31.

- Mesch, G. (2003). The family and the Internet: The Israeli case. *Social Science quarterly*, 85(4): 1038-1050.
- Nie, N. H. (2001). Sociability, interpersonal relationships, and the Internet reconciling conflicting findings. *American Behavioral Scientist*, 45(3): 420-435.
- Norton, R. (1983). Measuring marital quality: A critical look at the dependent variable. *Journal of Marriage and the Family*, 141-151.
- 尾木直樹 (2009) 『「ケータイ時代」を生きるきみへ』岩波ジュニア新書.
- 大日向雅美・新道幸恵 (1994). 「父親の子育て参加」『父性の発達－新しい家族づくり－』家政教育社, 65-88.
- Padilla-Walker, L. M., & Coyne, S. M. (2011). Turn that thing off! parent and adolescent predictors of proactive media monitoring. *Journal of Adolescence*, 34, 705-715.
- 酒井朗 (2009). 「序章 解説1 ICT環境下での子どもの生活と意識」『子どものICT利用実態調査報告書』ベネッセ 1-3.
- 酒井麻衣子 (2005). 『SPSS完全活用法 データの入力と加工』東京図書.
- Sarkadi, A. & Bremberg, S. (2005). Socially unbiased parenting support on the Internet: A cross-sectional study of users of a large Swedish parenting website. *Child: Care, Health and Development* 31(1): 43-52.
- 佐々木卓代 (2009a). 「子どもの習い事を媒介とする父親の子育て参加と子どもの自己受容感－スミミングスクールを対象とした調査から」『家族社会学研究』21(1): 65-77.
- 佐々木卓代 (2009b). 「父親の子育て参加と子どもの親和性」『家族関係学』28, 43-55.
- 佐々木卓代 (2009c). 「IT利用と夫婦関係」『平成19～20年度科学研究費補助金基盤研究課題番号19500647研究成果報告書：IT社会における育児期のインフォーマルネットワークと世代間関係：日米比較から』(研究代表者:お茶の水女子大学：石井クンツ昌子教授)
- 佐々木卓代 (2010a). 「子どもの習い事へのかかわりを通じた父親の成長と子どもの父親評価」『子ども社会研究』16, 31-44.
- 佐々木卓代 (2010b). 第30回家族関係学会セミナー自由研究報告書要旨.
- Sasaki, T. (2011a) Japanese mothers with young children and their internet use. Kyoto University Global COE (Ed.), *Journal of Intimate and Public Spheres*, 575-587.
- Sasaki, T. (2011b). Parental involvement and children's perception of competence: From gender perspectives. Center for Applied Ethics and Philosophy in Hokkaido University (Ed.), *Applied Ethics Old wine in NewBottles ?* 199-212.
- Scharer, K., & Faan, A. B. C. (2005). Internet social support for parents: The state of science. *Journal of Child and Adolescent Psychiatric Nursing*, 18 (1): 26-35.
- 総務省 (2012). 「平成23年通信利用動向調査の結果」
- Subrahmanyam, K., & Lin, G. (2007). Adolescents on the net: Internet use and well-being. *Adolescence*, 42(168): 659-677.
- 菅原ますみ (2003). 『個性はどう育つか』大修館書店.
- 菅原ますみ, 詫摩紀子, 1997, 「夫婦間の親密性の評価：自記入式夫婦関係尺度について」『精神科診断学』8: 155-166.
- 田中慶子 (2007). 「家族療育での時間と妻の結婚満足度」『季刊家計経済研究』76, 37-44.
- 豊田秀樹 (編) (2008). 『共分散構造分析[Amos編]－構造法廷式モデリング』東京図書.
- 山田隆 (2005). 「子育てにおけるインターネット利用：携帯電話による子育てホームページ」『東海女子大学紀要』25: 151-162.

Marital Quality and Child Care Involvement Affected by the Internet Use  
among Fathers and Mothers of Preschooler in Japan

Takayo SASAKI

ABSTRACT

According to the 2012 reports conducted by the Ministry of Internal Affairs and Communications in Japan, the use of the Internet technology through computers and cellular phones has become widespread for conducting communication among peoples and retrieving all kinds of information. This research also reveals that about 95% of the population in their 20s to 40s utilizes the Internet. Previous studies on marital quality in Japan show that high marital quality increases with better family functioning, and is a various important aspect among married couples and families. Therefore, in contemporary Japan, we need to consider the influence of the Internet use on understanding in relationships among couples. This study examines how the use of the Internet technology by Japanese fathers and mothers with preschool-age children influences face-to-face communication with their spouses concerning child care. Furthermore, their communications by the Internet use and face-to-face among couples influences their marital quality and child care involvement. The results of this study are as follows: The length of time fathers and mothers use the Internet is positively associated with their conversation hours and frequency of communication by the Internet with their spouses regarding child rearing. Fathers' and mothers' frequency of their cell phone communication is positively associated with their face-to-face communication with their spouses. Additionally, fathers' and mothers' face-to-face communication with their spouses is positively associated with marital quality and child care involvement. Moreover, fathers' marital quality is positively associated with child care involvement, whereas that of mother's is not.